

4. 淡水真珠対策研究費

1) 琵琶湖産イケチョウガイと霞ヶ浦産母貝の成長と真珠生成量の比較

氏家宗二

【背景・ねらい】 イケチョウガイを用いた淡水真珠養殖は、昭和58年頃より母貝の成長不良やへい死が起こりはじめ、近年では、淡水真珠養殖は著しく衰退するとともにイケチョウガイそのものの存続が危惧されている。このような時に、霞ヶ浦で種苗生産された真珠母貝（以下霞ヶ浦産貝という）が、県内の真珠漁場でも成長や歩留まりの良い事が分った（平成5年度事業報告）。そこで本年は、霞ヶ浦産母貝が琵琶湖産イケチョウガイの代替母貝としての可能性を検討するため、両種の施術貝の成長や歩留まりおよび真珠生成量等について調査を実施した。

【成果の内容・特徴】 供試貝は1994年3月に琵琶湖南湖で貝曳き網により採集した天然貝と、県内真珠業者が試験的に霞ヶ浦より入手した貝をそれぞれ30個体用いた。施術は、1994年5月に真珠業者に依頼して実施し、両側の外套膜に同種のピース13~18片を挿入した。施術貝は、近江八幡市の真珠漁場（西の湖）で縦型ネットに収容し、垂下養成した。

施術後7ヶ月目の1994年12月に、生残率と成長を調査した。また、そのうちのそれぞれ3個体について真珠生成量を調査した。

両種の生残率は、琵琶湖産竹ヲガイが67%で霞ヶ浦産母貝が93%であった。琵琶湖産竹ヲガイの成長は供試時の平均殻長139mmとまったく変わらず、平均殻重でも供試時の206gから219gに成長したにすぎなかった。一方、霞ヶ浦産母貝の成長は、供試時の殻長106mmが119mmに、平均殻重は供試時の131gが173gに成長していた。真珠生成量は、琵琶湖産竹ヲガイが平均0.15gで、霞ヶ浦産母貝が0.29gであった（表1、表2）。

本年の結果を琵琶湖産竹ヲガイの成長や歩留まりの良かった往年の数値（昭和45年頃）と比較すると、往年での歩留まりは90%以上であり、成長は、殻長では141mmが155mmに、殻重は274gが375gに成長していたが、本年の琵琶湖産竹ヲガイでの歩留まりは悪く、成長もほとんど見られなかった。霞ヶ浦産母貝では、歩留まりは往年と同様であったが、成長では往年の約40%と悪かった。また、真珠生成量では往年の琵琶湖産竹ヲガイの1.0~1.8gに比べると、両種ともに少なく20%以下であった。

【成果の活用面・留意点】

成長や真珠生成量の悪かった原因には、本年の猛暑と異常渇水による西の湖水位の低下および水草の異常繁茂の影響が考えられる。このため、引き続き調査を実施するとともに、水草の繁茂していない水域での調査を併せて実施する必要がある。

表1 琵琶湖産イケチョウガイと霞ヶ浦産母貝の西の湖での成長.

	測定月日	個数	平均殻長mm	平均殻幅mm	平均殻重g
琵琶湖産 イケチョウガイ	供試時 5/11	30	138.5	37.8	206.0
	調査時 12/9	20	139.0	39.0	218.5
霞ヶ浦産 母貝	供試時 5/11	30	106.9	27.4	131.2
	調査時 12/9	28	119.4	30.5	172.9

表2 琵琶湖産イケチョウガイと霞ヶ浦産母貝の個体別の体型と真珠生成量.

	個体NO	殻長mm	殻幅mm	殻重g	貝殻重量g	真珠生成量g
琵琶湖産 イケチョウガイ	1	128.9	36.6	197.5	86.9	0.18
	2	138.0	40.0	240.1	121.5	0.12
	3	144.3	40.2	206.1	74.7	0.16
霞ヶ浦産 母貝	1	125.3	30.8	193.3	91.4	0.26
	2	130.4	34.6	199.5	92.7	0.33
	3	123.1	29.0	165.6	74.7	0.29

調査日 平成6年12月9日